

環境から見る持続可能性

—サステナビリティ学入門—

東京大学名誉教授 鈴木基之

1. 趣旨

- ・ 「持続可能性」、「サステナビリティ」などの言葉は、現在色々なところで、かなりリベラルに使われるようになったが、必ずしもその本質に関する共通の理解は確立されていない。
- ・ 1987年にWCED(環境と開発に関する世界委員会)により提出された「持続可能な開発」という考え方は、人間活動が爆発的に拡大してきた20世紀後半からの状況を基に生まれてきたが、世界が複雑・多様化している中で、開発とは何か、どのような条件を満たせば持続可能なのかなどの詰めた議論も十分ではない。
- ・ 有限な容れ物(地球)の中で拡大を続ける人間活動は、いずれは破綻をきたすであろう。これを未然に防ぐためにも、今後どのようなパラダイム転換をしていくことが求められるのか、これが持続可能性を達成する上での基本である。
- ・ 本講義は、多様な視点から、受講者の方々自身で考えて頂く機会としたい。

2. 講義内容(案)

大略次の7つの話題から「持続可能性」に迫っていくものとする。

- (1) 環境問題とは何か
環境問題はなぜ発生したか、人間活動の拡大と環境対応の歴史を見る。
- (2) 地球環境の変化
種々の環境問題の拡大と地球規模化、地球温暖化と人間活動。
- (3) 水問題をどう考えるか
有限な水資源に依存している地球上の生命、人は水をどう使っているか。
- (4) 地球上の資源循環
地球規模の物質循環、炭素・窒素の循環は、人間活動における資源の利用。
- (5) エネルギー問題とは
人間活動とエネルギー消費、自然エネルギーの可能性は。
- (6) 生態系と人間
生物多様性とはなにか、なぜ重要か、生態系サービスとはなにか。
- (7) 持続可能な人間活動
「持続可能な開発」となにか、どのように考えるべきか、持続可能性の指標。
- (8) 持続可能な社会に向けて——総括・討論

3. 各講義の進め方

3.1 第1～7回は、各4時間(休憩を挟む)程度

内2時間程度を講師からの話題提供、2時間程度を質疑応答、討論の時間とする。

各回毎に、意見、感想、主張などをA4用紙1枚程度の分量のレポートとし、次の回の3日前までに提出する。提出は原則メールにて行う。

話題提供はパワーポイントにより行い、その図表の資料は事前にPDF資料として提供するものとする。

3.2 最終の第8回(2時間程度)は自由討論の時間とする。

持続可能性に関するそれぞれの考え方をまとめる機会とする。

3.3 終了後1週間以内に最終レポート(分量随意)を提出する。

これにより修了証を授与するものとする。

3.4 時折、講義後に懇親の場を設定して、より議論を深める機会を持つようにしたい(参加は任意)。